

## 学会企画チュートリアル・セミナー

### 『心理学の7つの大罪』から考える心理学研究法

企画：工藤与志文（東北大学）

企画：南風原朝和（東京大学）

企画・司会：村井潤一郎（文京学院大学）

話題提供：岡田謙介（東京大学）

話題提供：国里愛彦#（専修大学）

話題提供：平石 界#（慶應義塾大学）

指定討論：柴山 直（東北大学）

キーワード：研究法，研究文化，研究不正

#### 【企画趣旨】

2019年4月に、クリス・チェインバース著『心理学の7つの大罪』の翻訳がみすず書房より刊行された（原著2017年）。同書であげられている「7つの大罪」とは以下のものである。

第1の罪 心理学はバイアスの影響を免れていない

第2の罪 心理学は分析に密かな柔軟性を含ませている

第3の罪 心理学は自らを欺いている

第4の罪 心理学はデータを私物化している

第5の罪 心理学は不正行為を防止できていない

第6の罪 心理学はオープン・サイエンスに抵抗している

第7の罪 心理学はでたらめな数字で評価を行っている

上記を受け、最終章として「救済」という名の章が置かれている。以上の「告発」のうち、科学的方法の標準である「仮説演繹モデル」からの逸脱として、次のような問題点が指摘されている。

- ・直接的追試の欠如→偽の発見の排除を妨げ、エビデンスの基盤を弱める。
- ・低い検定力→真の発見を逃す可能性を高める。
- ・p値ハッキング→有意差が出るまでデータを収集する。望ましいデータだけ報告する。
- ・HARK行為（Hypothesizing After Results are Known）→データから仮説を生成し、その後でアプリオリなものとして提示する。
- ・発表バイアス→ネガティブな結果は公表されにくい。
- ・データ共有の欠如→詳細なメタ分析を阻害し、データ偽装の発見を妨げる。

同書で指摘されたこのような問題は、教育心理学研究にとっても無縁ではありえないだろう。本チュートリアル・セミナーでは、企画者の工藤による同書の紹介の後、3人の話題提供者が、上記の7つの罪のうちの1~2程度と絡めつつ、各々の専門を反映させながら実体験に基づいた（同書でいうところの）「救済」に関する発表をしていく。以上を通し、日頃の研究手続きの中に潜む落とし穴について学び、「建前としての仮説演繹法」から脱却を図るために何をすべきか、考える機会としたい。